

2015 年度 私立大学図書館協会 海外認定研修

調査・研修報告書

ドイツ語圏の大学図書館の見学と調査
～未来に向けた図書館の「場」としての役割～

獨協大学図書館
高島 豊

目次

I はじめに(ドイツ語圏図書館訪問の目的)	2
II ドイツ語圏の大学図書館訪問についての報告	3
II-1 ベルリン自由大学キャンパスライブラリー	3
II-1-1 大学、および図書館の基本情報.....	3
II-1-2 図書館見学.....	3
II-1-3 リー氏との面談	8
II-2 ベルリン自由大学文献学図書館.....	9
II-2-1 図書館の基本情報.....	8
II-2-2 図書館見学.....	8
II-2-3 ヴェルナー氏との情報交換.....	14
II-3 ドレスデン工科大学図書館.....	15
II-3-1 大学、および図書館の基本情報.....	15
II-3-2 中央図書館見学.....	16
II-3-3 "Makerspace"の見学	20
II-4 ウィーン大学中央図書館	21
II-4-1 大学、および図書館の基本情報.....	21
II-4-2 図書館見学.....	22
II-5 図書館見学の総括	27
III 帰国後のアンケート調査	27
III-1 アンケートの本文と回答	28
III-2 アンケート結果の総括.....	35
IV おわりに.....	36
V 参考文献、および URL	36

I はじめに(ドイツ語圏図書館訪問の目的)

2010年8月、および2014年8月に、プライベートでドイツを訪れた機会を利用して、ドイツの大学図書館を合わせて6館見学することができた。2010年の訪問時には、日本とは発想の異なる利用者サービスが多くあることを目の当たりにして大変興味を持ったことを念頭に(2011年度私立大学図書館協会海外認定研修報告書参照)、2014年の訪問では、「学びの場」としての図書館の役割に着目し、利用者が快適に滞在できる環境への取り組みについて見学・調査を行った(2014年度私立大学図書館協会海外認定研修報告書参照)。

2度に渡る訪問で、ドイツの大学図書館では伝統的な施設やサービスと、斬新な施設やアイデアが共存している姿を見ることができ、ドイツの大学図書館の未来志向の取り組みについて興味を抱くこととなった。

この度の訪問では、こうした観点と共に、日本の多くの大学図書館が、未来に向けた魅力ある図書館づくりと、そのための一環として行っている学生との協働に相当する取り組みについても調査を行うべく、下記の4つの大学の大学図書館を訪問し、館内を案内して頂いた。

- ①2015年9月4日(金) ベルリン自由大学キャンパスライブラリー
- ②2015年9月7日(月) ベルリン自由大学文献学図書館
- ③2015年9月8日(火) ドレスデン工科大学中央図書館
- ④2015年9月14日(月) ウィーン大学中央図書館(オーストリア)

今回は、過去2回の図書館見学では訪問していなかった工学系の学部が中心の工科大学(ドレスデン工科大学)と、ドイツ以外のドイツ語圏で代表的な国であるオーストリアの首都ウィーンの、ドイツ語圏で最古の歴史を持つウィーン大学にも見学の範囲を広げて見学することができた。

上記の図書館訪問に際しては、現地で案内して下さった方に、日本の大学図書館で導入されている未来志向型の施設やサービス、快適な空間を実現するための取り組み、学生との協働の実例を紹介したレポートを予め送り、事前にこちらの興味・関心事を伝え、訪問時にはそれに該当するところを中心に見学させて頂けるように準備を行った。

また帰国後、訪問した図書館に、「場」としての図書館の未来への展望と、学生との協働についての考えと実施例を問うアンケート調査への協力をお願いした。

本報告書では、まず訪問した4つの大学図書館についてそれぞれ訪問順に図書館の見学について報告を記し、次にアンケート調査で得られた結果と、これについての簡単な考察を記した。

II ドイツ語圏の大学図書館訪問についての報告

以下に、今回訪問したドイツ語圏の4つの大学図書館についての報告を記す。

II-1 ベルリン自由大学キャンパスライブラリー

ベルリン自由大学キャンパスライブラリーで日本学分野を担当している Dr.テレージア・ベレニケ・ポイカー氏(Frau Dr. Teresia Berenike Peucker)に図書館内を案内して頂き、その後同図書館長のマルティン・リー氏(Herr Martin Lee)と面談してお話を伺った。

II-1-1 大学、および図書館の基本情報

大学名	ベルリン自由大学 Freie Universität zu Berlin
大学 URL	https://www.fu-berlin.de/
所在地	ベルリン市
創立年	1948 年
学部数	12 学部
学生数	約 32,800 名
図書館数	15 館
日本の協定校	中央大学、国際基督教大学、慶応大学、京都大学、南山大学、日本大学、上智大学、東京大学、筑波大学、早稲田大学、名古屋大学、自然科学研究機構、獨協大学

図書館名	キャンパスライブラリー Campusbibliothek
竣工	2015 年
蔵書数	約 100 万冊
開館時間	平日：9:00～22:00／土日：10:00～20:00
閲覧席数	950 席

ベルリン自由大学は、第二次世界大戦後の 1948 年に、当時東西に分断されていた西側(西ベルリン)に、教授と学生らによって「真理」、「公正」、「自由」を理念として創設された総合大学で、現在は 12 学部を擁し、32,000 人を超える学生が学んでいる。

ベルリン自由大学は、ボローニャ宣言の一環として制定されたエリート大学養成プログラム「エクセレンス・イニシアティブ」の 3 分野全てにおいて助成を受けている 11 大学の一つである。

II-1-2 図書館見学

キャンパスライブラリーは 2015 年春、これまであった 24 の学科の図書館や研究機関の図書館が統合されて新しくオープンした。以前からあった図書館と新築の図書館を通路でつなげ、2棟が一つの図書館として機能している。蔵書数は約 100 万冊。日本学、朝鮮学、イスラム学といった東アジアや中東地域を扱う学科、化学、生物学、教育学などに関する資料が集まっている(写真 1-①)。新館は 2015 年のドイツ建築家連合会(Berliner Landesverband des Bundes Deutscher

Architekten (BDA))により表彰された。



写真 1-①



写真 1-②

エントランスは新館側にある。入退館ゲート(写真 1-②)は、ドイツの他の図書館と同様に、フラッパーは設けられておらず、一般市民などの学外者も自由に入館することができる。入館の際、手荷物やコート類はゲート手前にあるロッカーに預けなければならない。



写真 1-③



写真 1-④

ゲートを入ると広々としたエントランスが迎えてくれる(写真 1-③)。フロアの両サイドに出入口があり、2 方向からの図書館への導線が確保されている。エントランス手前には、「最初のインフォメーション」(Erst-information)と称し、基本的な利用案内や館内案内のためのカウンターがある(写真 1-④)。その奥に貸出返却カウンター、そしてレファレンスカウンターが並んでいて、利用者を利用に応じたカウンターにスムーズに案内することができる。エントランスホールには自動貸出・返



写真 1-⑤

却機(写真 1-⑤)、蔵書検索用 PC、タッチ式の案内用大型ディスプレイなども揃っていた。

吹き抜けの周囲を取り囲むように設置された閲覧席は、建物の最上部などから自然光を取り入れて、明るく開放感のある空間が実現している(写真 1-⑥,1-⑦)。

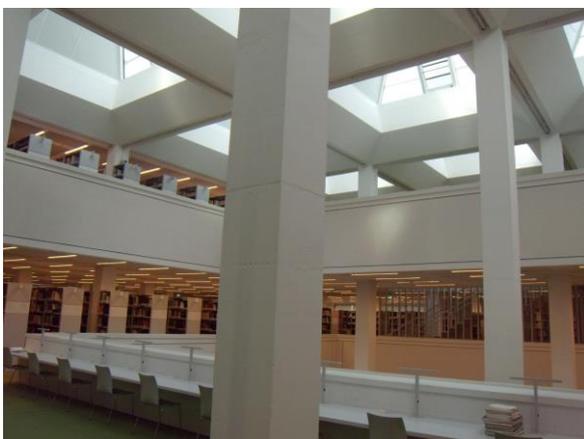


写真 1-⑥



写真 1-⑦

新館と旧館を繋げる部分の屋上には芝生や樹木が植えられている(写真 1-⑧)。通常時は屋上に出ることはできない。

閲覧席に、メモが添えられて資料が置かれているのを時々見かけた(写真 1-⑨)。メモには「■月■日まで置かせてください」と記されており、このような方法で席と資料を確保しておくことができる。



写真 1-⑧



写真 1-⑨

次ページの写真 1-⑩は、新館最上階にある「マルチ機能ルーム」と名付けられたラーニングコミュニティ的なスペース。40 名程度が同時に利用することができる。グループ学習を支援するような備品(ホワイトボードや大型ディスプレイ等)は特に置かれていなかった。



写真 1-⑩



写真 1-⑪

写真 1-⑪はグループ学習室。2名から8名までのグループで、1日最長で4時間の利用ができる。予約制で、1階カウンターで申請できるほか、ネット予約も可能。

写真 1-⑫は、大学院学生用の個室(キャレールーム)。掲示用ボードや棚、ホワイトボードなどが備えられ、無線LANとLANケーブルの利用ができる。4週間の連続利用ができ、利用期間中は貸出した図書館資料や私物を個室内に置いておくことができる。部屋は全部で48室あり予約制。



写真 1-⑫

見学したときも多くの部屋は貸出中で、ボードなども有効に使い「自分の勉強部屋」の感覚で利用している様子が窺えた。利用希望者は多く、予約待ちリストに登録しても実際に使えるまでにはかなり待たなければならないとのこと。

キャンパスライブラリーの閉館時刻は、平日が午後10時、土日は午後8時であるが、閉館後であっても、教員・研究員は専用のキーで24時間図書館に入って資料を利用できる。写真 1-⑬は、閉館後に館内で資料の貸出・返却手続きを行うための機械。



写真 1-⑬

写真 1-⑭は新館と旧館の連絡部分。各フロアで両者の行き来ができる。新館が白を基調色にしているのに対し、旧館は赤が基調色。くつろげるソファや観葉植物が置かれていて、リラックスできる場所になっていると共に、違う学部の学生達と顔を合わせる機会も多く、お互いが知り合い、交流する場を演出しているとのこと。



写真 1-⑭

写真 1-⑮は旧館の最下部の地下 1 階から全体を見上げたところ。旧館内も 2015 年春にリフォームされた。

天井と壁面には透明ガラスが多く用いられ、自然光をいっぱいに取り入れた吹き抜けの大きな空間は、さながら大温室のような雰囲気を作り出していた。自然光は閲覧席ゾーンの採光に効果的である一方で、書架のエリアはフロアの壁側にあり、資料保護のため、太陽光が直接あたらないようになっている。

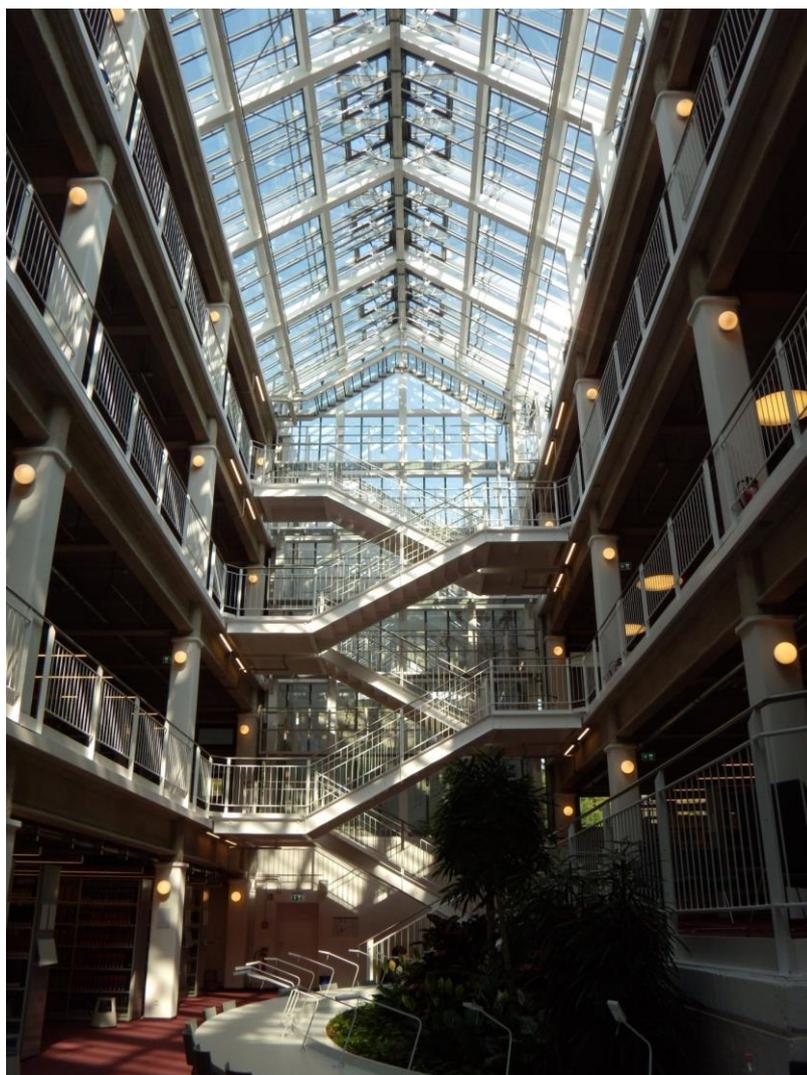


写真 1-⑮

吹き抜けの最下部には噴水があり(写真 1-⑯)、常に柔らかな水音が聞こえている。噴水近くの観葉植物帯を取り囲むように閲覧席が設置されていて(写真 1-⑰)、利用者は植物を眺め、水音を聴きながら過ごすことができ、リラックスして勉強ができる人気の場所である。

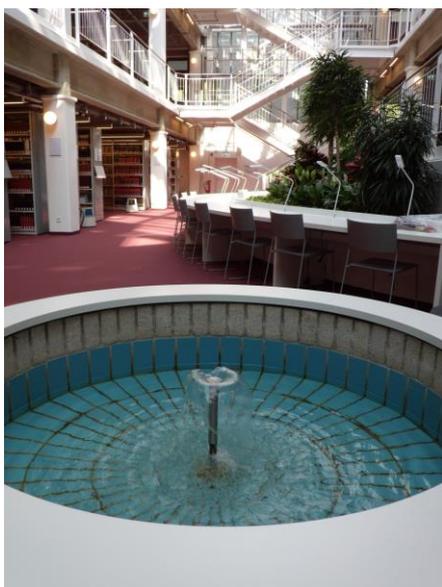


写真 1-16

新館最上階の「マルチ機能ルーム」と呼応するように、旧館の最上階にもグループ学習用エリアが設けられている(写真 1-18)。この他、旧館には乳児や小さな子供連れの利用者のための個室、親子ルームもあり、見学時は丁度利用中だった。また、トイレにはおむつ交換台が備えられていた。

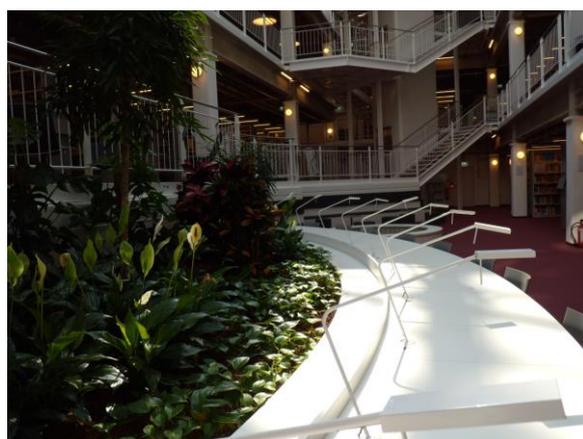


写真 1-17



写真 1-18

II-1-3 リー氏との面談

ポイカー氏に館内を案内して頂いた後、館長室で館長のリー氏と面談する機会を頂いた。リー氏との面談で伺った内容を以下にまとめて記す。

- ・ベルリン自由大学の図書館は中央館と分館というシステムではなく、それぞれの図書館が等価値で独立して管理・運営され、互いに連携体制を取っている。これは、中央管理型のシステムと比べて、それぞれの図書館により自由が与えられ、予算や年間計画、将来計画等においても、それぞれの図書館の裁量権がより大きく与えられるという利点がある。また、同じベルリン市内にあるもう一つの総合大学であるフンボルト大学とは常時連携を取り合い、相互資料貸借もスムーズに行われているが、資料の収集についてはそれぞれが独自に行っている。

- ・キャンパスライブラリーは、24 の学科の図書館や研究機関の図書館を統合する形で設立された。学内に散らばっていた図書館からの資料移動と、整理、請求番号の振り直しなどでは大きな労力を要したが、これらがひとつに統合されたことで、利用者にとっては非常に使い勝手の良い図書館となった。

様々な分野の資料が一つの図書館に集められたことで、それを利用する利用者の出会いも多くなり、コミュニケーションの活性化にもつながる。これによって、新しいプロジェクトを生み出す機

会となることも期待されている。

・図書館の将来像としては、授業支援や学生の自主学習の支援を積極的に行い、社会的な側面を重視していく必要がある。これらを喚起するために、様々な学術的なイベント(ワークショップやシンポジウム等)を計画している。

・キャンパスライブラリーには、利用目的に合った様々なタイプの閲覧席や個室が備わっている。旧館最下部にある噴水の水音は心地よさを運び人気が高いが、これを「うるさい」と感じたり、広い空間を落ち着かないと感じる利用者も存在するわけで、そうした場合にはもっと静かな場所や、周囲が仕切られた空間を選べ、「自分の居場所」を見つけることができる。このように多様な過ごし方ができる場があることが、これからの図書館にとっては重要である。

II-2 ベルリン自由大学文献学図書館

ベルリン自由大学の文献学図書館では、館長の Dr.ヴェルナー氏(Herr Dr. Klaus Ulrich Werner)に図書館内を案内して頂いた。

II-2-1 図書館の基本情報 (大学の情報はII-1-1に同じ)

図書館名	文献学図書館 Philologische Bibliothek
竣工	2005年
蔵書数	約75万冊
開館時間	平日:9:00~22:00 / 土日:10:00~20:00
閲覧席数	680席

II-2-2 図書館見学

それまで別々の学部図書館に分かれていた哲学・人文科学系16学科の資料が、2005年に新設されたこの図書館(写真2-①)に統合された。設計はイギリスの著名な建築家ノーマン・フォスターによるもので、その特徴的な形状とエコを重視した画期的な機能から「ベルリンの脳」というニックネームを持ち、2006年にベルリン建築賞、2007年にはドイツ建築賞を受賞している。



写真2-①

入館ゲートを入った館内の中央部分は吹き抜けになっていて(写真 2-②)、エントランス正面に貸出・返却カウンター、その奥にレファレンスカウンターがある。地上 4 階、地下 1 階建て。

建物の壁は 2 重構造になっており(外壁はアルミとガラス材、内壁は合成樹脂)、コンピュータの制御によりハッチの開閉で外気や太陽熱をコントロールして空気の流れを生み出し、館内を常に適切な温度に保つシステム。床暖房は使用するが、空調(冷房)は入っていない。

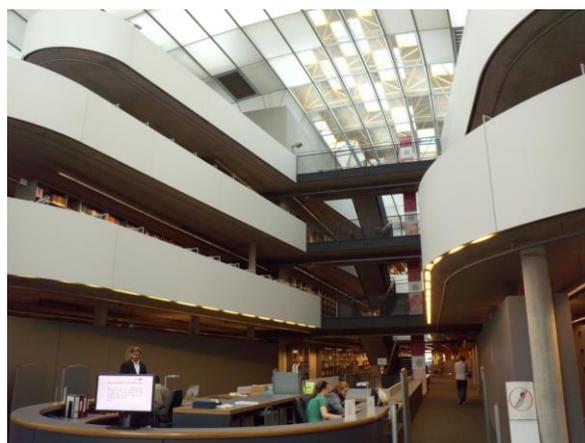


写真 2-②

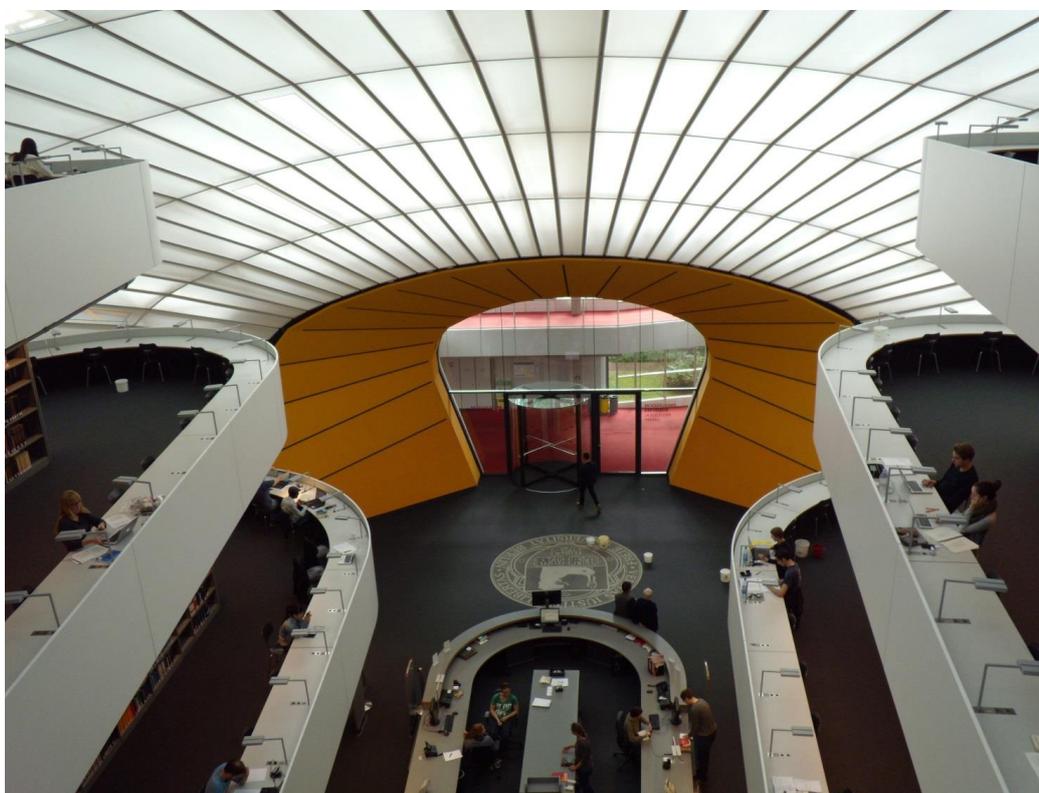


写真 2-③

閲覧席は各フロア吹き抜けの周囲と(写真 2-③)、外周部分(写真 2-④)に並んでいる。建物外観と同様に、内部の壁も曲線を描いているが、これはデザイン性に優れているだけではなく、角の部分に生じるスペースの無駄を極力排し、温度調節を効果的にする狙いがある。

壁の素材が光を通すため採光に優れ、日中は閲覧席の利用に理想的な採光が得られるよう

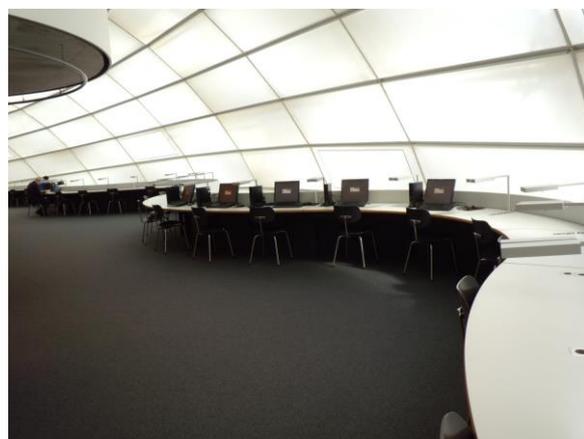


写真 2-④

に設計されている。エントランス開口部の黄色のデザインは太陽をイメージしている。

本施設は、通常と同規模の施設に比べ暖房費で 60%、電力全体でも 50%の節約が実現しているという。壁には窓が殆どなく、閲覧席から外の景色は見えないが、「陽が陰ったり、風が吹いて梢が揺れたり、雨が降っていることを感じることができます。」

内側の壁の曲線は、外壁に合わせて写真 2-⑤のように下の方で内側に入り込み、上の階の席よりも明度の低い採光になる。利用者は、利用目的や気分によって、明るさが異なる閲覧席を選んでいる。

外周部分と吹き抜け周囲の閲覧席では、吹き抜け周辺部に設置された閲覧席(写真 2-⑥)の方から埋まって行くという。外周部分の席は外壁に向いているが、吹き抜け周辺部の席は向かい側の席や人の動き、吹き抜け下の様子が視界に入り、人の動きや気配が感じられることから、「自分は独りではない」という気持ちでいられることが好まれるため、とのことである。



写真 2-⑤



写真 2-⑥



写真 2-⑦

各閲覧席には、写真 2-⑦のように電源コンセントと LAN ケーブル用端子が設けられている。その上部に見られる突起(フック)は、個人が持ち込んだノートパソコンを盗難防止用ワイヤーで繋げて施錠しておくためのもの。同様のフックは、今回見学した他の全ての図書館の閲覧席で見られた。閲覧席の一部には PC が設置されている。資料利用は年々デジタルへ推移しており、当初は閲覧専用図書館としてオープンしたが、



写真 2-⑧

現在は 75 万冊の蔵書の 98%は貸出可にしている。それでも紙媒体の資料の利用率は低い。レファレンスを利用する学生も年々減少している。

紙媒体と同時にデジタル媒体でも所蔵している雑誌は、配架棚のフレームに QR コードが印刷されており(写真 2-⑧)、利用者はその場でデジタル媒体に簡単にアクセスすることができる。

写真 2-⑨はオーバーヘッドタイプのボックスキャナー。ドイツの大学図書館では利用者が自由に使えるボックスキャナーが大抵備えられている。文献学図書館には 3 台のキャナーが備えられており、1 ページ分 4 セント(約 5 円)で利用でき、取り込んだデータは持参した USB メモリーに保存する。蔵書検索結果や、個人の持込み PC の印刷データをサーバーに送り、館内に設置されている複合機からプリントアウトできるシステムも整っている。館内にはプリントショップも入っていて、製本やラミネート加工、パンフレット作成などを請け負っている。

館内では音声ガイドサービスを提供している。カウンターで音声ガイド用の機器を借り、写真 2-⑩のマークがある場所で、示された番号の説明を聴きながら館内を巡る。館内資料と建物について約 45 分間の説明を、ドイツ語、英語、フランス語のなかから言語を選択して聴くことができる。



写真 2-⑨

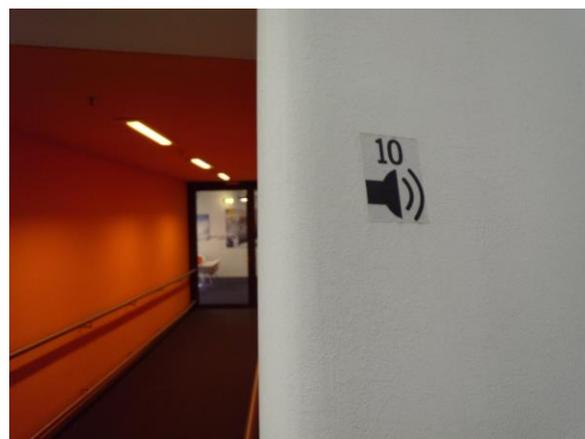


写真 2-⑩



写真 2-⑪



写真 2-⑫

写真 2-⑪は、視聴覚資料利用のためのブース席。ブース左に視聴覚資料の再生機器が備えられており、一番上には LP レコードプレイヤーも置かれている。LP レコードは音声学関連資料と

しての利用があるという。写真 2-⑫は耳栓販売機で、大抵のドイツの大学図書館で見かける。最近では自前のイヤホンを耳栓代わりに使う利用者が多いため、あまり使われていないとのこと。

資料の館内長期利用ワゴン(写真 2-⑬)も、ドイツの多くの大学図書館で使われている。図書館内での調査・研究や論文作成のために必要な資料を、退館する度に持ち帰ることなく、図書館内に自分専用の移動可能な置き場所として利用できる。ワゴンは 22 台あり、貸出手続きを行った図書館資料や私物の勉強道具を入れて施錠ができ、4 週間(延長可)利用できる。利用対象者は博士課程、教授資格取得準備課程の学生と、客員教員。



写真 2-⑬

写真 2-⑭は、最上階にあるラウンジ。リラックスできる空間として作られ、椅子の形状や色、隣との間隔にも気を配っている。ラウンジのある最上階には、書誌等の参考図書の書架もあるが、紙媒体の書誌は近年利用されなくなってきたため、その場所をグループ学習のためのスペースに置き換える構想も出ている。



写真 2-⑭

この新館は、建物全体が二重構造の壁面に包まれた一つの大きな空間として成り立っているため、内部には壁がない構造になっている。このため、壁で閉じられた空間にする必要があるグループ利用室やセミナールームなどの

個室、或いは閉架書庫は、新館と既存の建物を繋ぐ通路のスペースを改装して作られた。写真 2-⑮は一人用の研究個室。文献学、人文科学専攻の学生が利用でき、4 週間連続して使うことができる。この間は貸出資料や私物を部屋に置いておける。写真 2-⑯はグループ学習室。

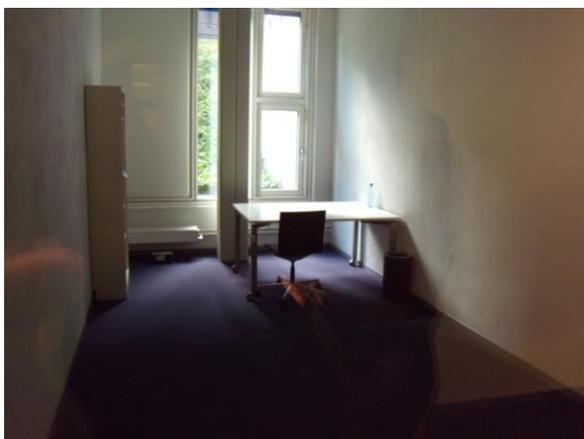


写真 2-⑮



写真 2-⑯

新館が構想された当初は、ラーニングcommonsがまだ認識されておらず、そのうえ文献学の学生は専ら独りで学習することが殆どだったため、グループ利用の環境は十分とは言えないということだが、この通路のスペースにはセミナールーム(写真2-⑰)とラーニングcommons(写真2-⑱)も作られた。ラーニングcommonsには、キャスター付きのテーブルと椅子、ホワイトボード、パーテーションが置かれていた。また移動可能な多孔コンセントも複数用意されていた。

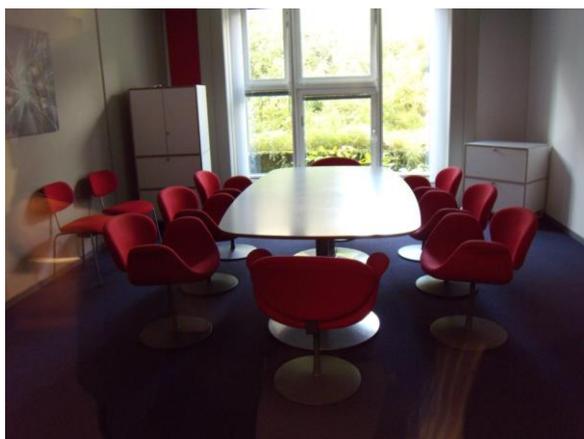


写真 2-⑰

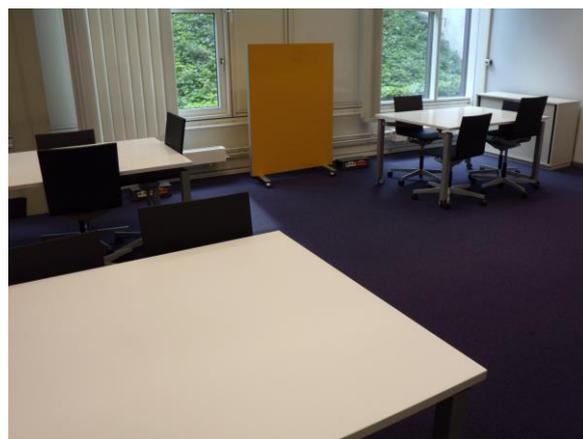


写真 2-⑱

Ⅱ-2-3 ヴェルナー氏との情報交換

館内を案内して頂きながら館長のヴェルナー氏から伺った話で、上記の写真の説明で記せなかった内容を以下にまとめて記しておく。

・1960年代に創設されたベルリン自由大学のキャンパスの施設は、建て替えや改装が必要な時期を迎えている。これまでの複数の学部図書館を統合する形で新築されたこの図書館は、エネルギー消費を極力抑えるようエコロジーを重視し、なおかつ利用者にとって理想的な快適空間を実現することに成功した。

・ボローニャ宣言¹による大学改革の影響で、学生の勉強の仕方に大きな変化が見られるようになった。大学改革以降、学生は1学期目から多くの試験が科せられるようになり、これによりレポート作成の機会が大幅に増え、独り学習ではなく、グループでの学習機会が増えている。このため、様々な形態の閲覧席(学習スペース)が求められるようになった。しかしながら、本図書館はそのような変革が起きる前に計画されたため、多様な目的での利用に対応した施設(複合的な施設)は十分とは言えない。新館内では隣り同士で小さな声で話し合う程度の学習ができるのみである。紙媒体の資料の利用が非常に少なくなっているため、参考図書コーナーや閉架書庫を近い将来グループ学習のためのスペースに改装したい。

・レファレンス関連の相談でカウンターを訪れる学生は非常に少なくなった。メールによ

¹ ヨーロッパ各国の大学における国際競争力を高めるため、それまで各国が独自に設けていた学位取得課程を統一することをボローニャで謳った宣言。ドイツでも大幅な改革が行われ、カリキュラムも学位取得に要する期間が縮小された。

る相談はあるが、個人情報の取り扱いが非常に厳しく、ある職員が受けた相談を他の職員に転送する際にもとても神経を使わなければならない。対応する職員との世代の違いによる意識のズレも起きている。図書館の従来型の情報提供サービスは大きな見直しの時期を迎えている。学生がどんなことを図書館に求めているかをきちんと認識し、それに相応しいサービスを提供する必要がある。

・この図書館にはスタッフのためのオフィスが入っていない。被膜により空間を大きく包み込むような構造であることから、完全に仕切られた空間を作ることが困難であるという理由が一つにはあるが、その他に、この図書館はまるごと利用者のための開かれた空間にしたかったというコンセプトにも拠っている。

II-3 ドレスデン工科大学図書館

ドレスデン工科大学では、利用者サービスとオリエンテーション担当のドリス・アンデル=ドーナト氏(Frau Doris Ander-Donath)に中央図書館を案内して頂き、その後“DrePunct“と呼ばれる学部図書館にある“Makerspace“という制作工房を見学した。

II-3-1 大学、および図書館の基本情報

大学名	ドレスデン工科大学 Technische Universität Dresden
大学 URL	https://tu-dresden.de/
所在地	ドレスデン市
創立年	1828/1961 年
学部数	14 学部
学生数	約 37,000 名
図書館数	6 館
日本の協定校	東北大学、慶応大学、山梨大学、関西大学、岡山大学

図書館名	ドレスデン工科大学図書館 Die Sächsische Landesbibliothek – Staats- und Universitätsbibliothek Dresden (SLUB)
竣工年	2003 年
蔵書数	5,388,595 冊(図書館全体の蔵書数)
開館時間	月～土: 8:00～24:00 / 日: 10:00～18:00
閲覧席数	2,297 席
年間入館者数	2,307,243 名

II-3-2 中央図書館見学

ドレスデン工科大学は、工学系の学部だけでなく人文系の学部も充実したザクセン州最大の総合大学。ドレスデン工科大学図書館は、ドイツでも最大級の学術図書館の一つで、州立図書館、大学図書館、国立図書館の3つの機能を有している。これらを総称するドイツ語名の表記が長いため、それぞれの頭文字を取った略称”SLUB”で呼ばれている。写真3-①は中央図書館正面。



写真 3-①

州立図書館としては州に関する資料、州内で発行された納本義務のある資料を包括的に収集し、大学図書館としては幅広い学部構成を網羅した、研究のための情報提供の役割を担い、また、国立図書館として、ザクセン州の全ての図書館のなかでの中心的な調整機能、サービス機能を果たす機関でもある。

図書館入口を入ると広いエントランスがあり、総合案内カウンターや利用者登録をセルフで行うPCがある。手荷物やコートはエントランスのロッカーに預け、BDS機能の付いたゲートから図書館内に入る(写真3-②)。写真3-③は自動返却機。延滞した場合は館内に設置されている料金支払機で延滞料を支払わなければならない。



写真 3-②



写真 3-③

中央閲覧ホールは中央図書館の中核をなす施設である。席数は200で、PC設置席もある。4フロア分の高さの広い空間は壮観。1階の閲覧席フロアと、らせん階段で上る2階ギャラリーゾーンは壁面書架が取り囲んでおり、主に事典などの参考図書が配架されている。



写真 3-④

図書館の多くの部分は吹き抜けになっており自然光が多く取り入れられている。床から天井まで真っ直ぐに貫く柱が、力強く伸びやかなイメージを与えていた(写真 3-⑤)。

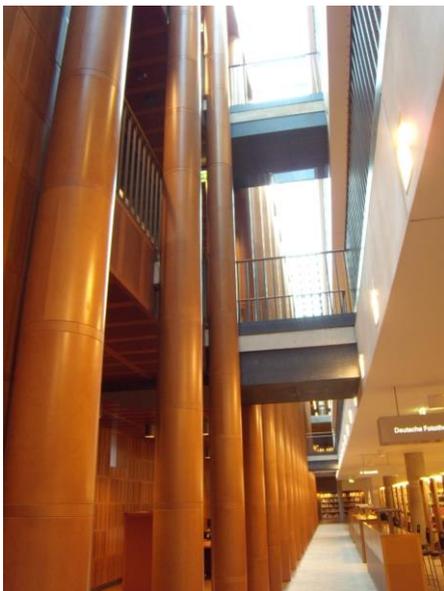


写真 3-⑤

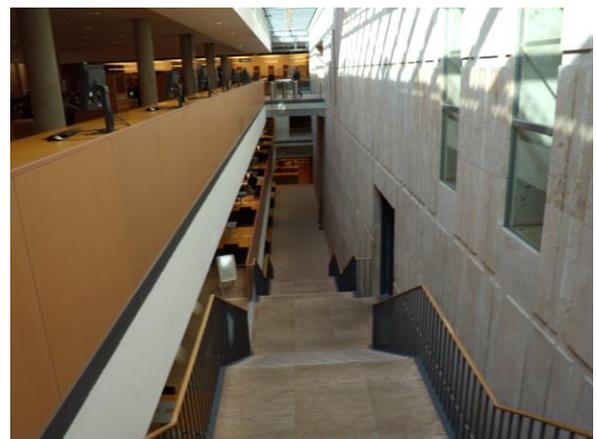


写真 3-⑥

建物の外観を印象的に彩っているベージュ色の石材は、内装にも使われている(写真 3-⑥ 右側の壁)。この石材は、チューリンゲン・トラパーチンと呼ばれる地元産の大理石の一種。やわらかな色合いと肌触りの石材が使われた壁が外観と内装に統一感をもたらしている。

館内には資料を搬送するためのレールが敷設されており、写真 3-⑦のようなステーションからプラスチックのコンテナに入れて他の場所へ送り届けることができる。資料搬送ステーションは全部で 20 か所ある。送られた資料は、写真 3-⑧の資料保管用書架に置かれ、リクエストを出した利用者は、資料に挟まれた引き取り番号のメモを頼りに自分で資料を引き取る。このように、予約や請求した資料の引き取りを、取り置き用の書架からセルフでピックアップすることは、ドイツの大学図書館では一般的に行われている。



写真 3-⑦



写真 3-⑧

中央図書館には利用目的に応じて様々な部屋やスペースが備わっている。写真 3-⑨は、ラップトップ付きのセミナールーム兼グループ学習室。6 名～20 名用のグループ学習室が全部で 8 部屋ある。中央閲覧ホールを窓から見下ろすように、個室キャレルが取り囲んでいる(写真 3-⑩)。2 人用や障害者用のキャレルもある。キャレルは論文作成中の学生・院生が利用できる。



写真 3-⑨

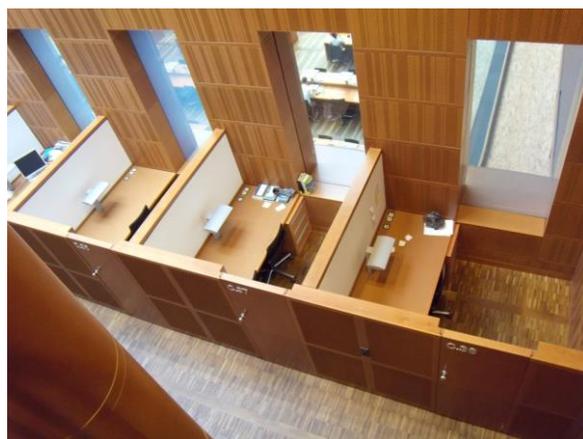


写真 3-⑩

親子室(写真 3-⑪)は予約なしで利用できる。大人 3 名と子供 3 名まで利用可。乳児から小学生

ぐらいまでの幅広い年齢の子供に合った椅子やテーブル、本、おもちゃなどが揃っていて、学生用にパソコンも設置されている。写真 3-⑫は、広い机と背の高い椅子の閲覧席。新聞や大型本を立てて閲覧しやすい設計になっている。写真 3-⑬は、マイクロリーダーが置かれていたスペースを改装して作られたリラックスゾーンのボックス型のコーチ。ドイツの砂浜で使われる椅子をイメージし、海辺にいる気分を味わってもらおうというコンセプト。ここでは一人で寝そべっても構わない。



写真 3-⑪



写真 3-⑫



写真 3-⑬

リラックスゾーンのほかに、写真 3-⑭のような複数で座れるソファの置かれたラウンジコーナーもある。

各フロアにはコピー機やスキャナーが設置されているほか、印刷・製本を請け負っているコピーショップが入っている(写真 3-⑮)。様々な形態のデータ印刷、コピー、スキャニング、簡易製本、レザーハードカバーのデラックス製本などができる。図書館が所蔵する貴重書などをデザインしたオリジナルポストカードやポスターなども販売している。



写真 3-⑭



写真 3-⑮

中庭に面したカフェテリア(写真 3-⑯)ではパンや菓子などの軽食と、温かいコーヒーや冷たい飲み物を提供している。写真 3-⑰は中庭の芝生広場の様子。くつろげるデザインチェアが置いてある。また、カフェテリア手前に積み重ねてある折り畳み式のデッキチェアを自由に持ち出して、ここで使うこともできる。



写真 3-⑯



写真 3-⑰

中央図書館のツアーの最後に「本のミュージアム」へ案内して頂いた。ミュージアムには SLUB が所蔵している資料の表紙絵の原画などが多数展示されていた。毎日 10 時から 18 時まで自由に見学できる。ミュージアム内には、更に奥にある「宝物館」への施錠された扉がある。

空調や調光が整備された宝物館内(写真 3-⑱)には、ドレスデン絵文書(Codex Dresdensis)の名で知られている世界的に貴重なマヤ文明の絵文書や、ルターやグリムの自筆原稿、音楽関係ではバッハの口短調ミサ、ウェーバーのオペラ「オリアンテ」のほか、ヴィヴァルディやシューマン等の自筆の総譜やパート譜など、非常に貴重な資料が多数展示されていた。宝物館は本のミュージアム内にあるインターホンで連絡すれば見学できるほか、毎週土曜日にガイドツアーも実施している。この他、学校関係でのガイドツアーの要望も多いとのこと。



写真 3-⑱(SLUB のホームページより)

宝物館が所蔵する貴重資料の多くはデジタル化され、デジタルアーカイブとしてウェブ上で以下の URL アドレスより一般公開されている。

<http://www.slub-dresden.de/ueber-uns/buchmuseum/virtuelle-schatzkammer/>

Ⅱ-3-3 "Makerspace" の見学

中央図書館を案内して頂いたあと、中央図書館の向かいにある"DrePunct"と呼ばれる学部図書館内にある"Makerspace"という制作工房を見学させて頂いた。この図書館は建築工学、交通

学、電子工学等の学部図書館で、蔵書数は 60 万冊、300 席の閲覧席がある大きな図書館である。ここにある工房”Makerspace” (写真 3-19)では、3D プリンタやレーザーカッター、デジタル機器などの特殊な装置が備えられ、グループ実習や作品制作を行うことができる。ここで、ちょうど稼働中の 3Dプリンタ(写真3-20)などを見ることができた。「実験と実践を通じた学際的な出会いの場」として、人文系学部の学生にも開かれており、専門のスタッフによるサポートも行われる。夏休み中ではあったが、何人もの学生が制作を行っていて、作業について学生から説明もしてもらえた。



写真 3-19

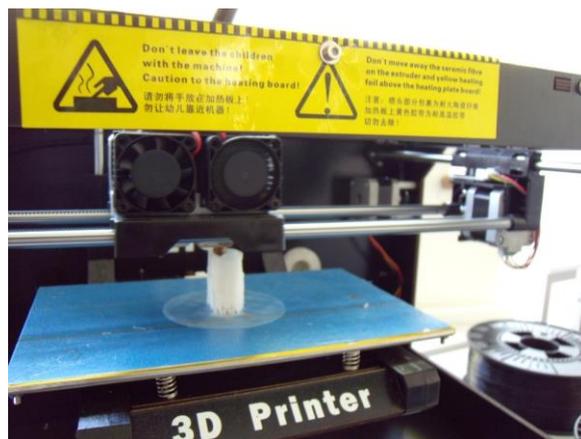


写真 3-20

II-4 ウィーン大学中央図書館

ウィーン大学中央図書館で利用者サービスとツアーを担当しているイレーネ・フリードル氏 (Frau Mag. Irene Friedl)に館内を案内して頂いた。

II-4-1 大学、および図書館の基本情報

大学名	ウィーン大学 Universität Wien
大学 URL	https://www.univie.ac.at/
所在地	ウィーン市(オーストリア)
創立年	1365 年
学部数	19 学部
学生数	約 93,000 名
図書館数	39 館
日本の協定校	一橋大学、京都大学、明治大学、桃山学院大学、大阪大学、東北大学、首都大学東京、横浜市立大学、早稲田大学 獨協大学(学部間協定)

図書館名	ウィーン大学中央図書館 Die Hauptbibliothek der Universität Wien
竣工年	1884 年
蔵書数	2,722,356 冊 (図書館全体の蔵書数: 7,161,562 冊)
開館時間	平日: 9:00~22:00 / 土: 9:00~18:00
閲覧席数	450 席

II-4-2 図書館見学

ウィーン大学はヨーロッパ最大・最古の総合大学の一つで、ドイツ語圏では最も古い歴史を持つ。また、オーストリアでは最大の総合大学。

ウィーン大学図書館は蔵書数 700 万以上を有するオーストリア最大の図書館で、大学同様、ドイツ語圏最古の歴史を持つ(創設は大学と同じ 1365 年)。ユネスコ世界文化遺産にも登録されているウィーン中心部(1 区)の、歴史的建造物が建ち並ぶ「リンク」と呼ばれる環状通り沿いにある。

中央図書館が入っている大学の「本部棟」は、1884 年に建てられた歴史的建造物で、市内の観光コースにもなっている。

本部棟へ入ると、吹き抜けの壮麗なエントランスホールが出迎えてくれる。エントランスホールから写真 4-②の階段を上ったフロアに図書館がある。

図書館の手前にある特別講堂には、19 世紀末にウィーンで活躍したグスタフ・クリムトがウィーン大学の依頼で各学部のテーマをモチーフに制作した天井画を見ることができる(大部分はナチスの手により焼失し、その部分には写真パネルがはめられている)。

入口付近にある蔵書検索用 PC が置かれた台は、棚の扉が開放されており、PC 本体に USB スティックを差し込んで、検索結果データを保存して持ち運ぶことができる(写真 4-③)。延滞金を支払う際に利用する支払機兼チャージ機は(写真 4-④)、オーストリアの図書館でも普通の風景であった。



写真 4-①



写真 4-②



写真 4-③



写真 4-④

中央図書館は古い歴史的建造物で、内部の大きな改装ができないため、障害者に配慮したバリアフリーを完備することは難しいが、写真 4-⑤のように、階段には車椅子用昇降機が取り付けられ、利用者自らが機械を操作して移動できるようになっている。

また、視覚障害者のためには、利用希望の資料をスキャンしてメールで利用者へ送付するサービス、点字ディスプレイや音声読み上げ装置などによる支援を行うなど、障害者にとっても使いやすい図書館として、施設やサービスの改善に努めている。

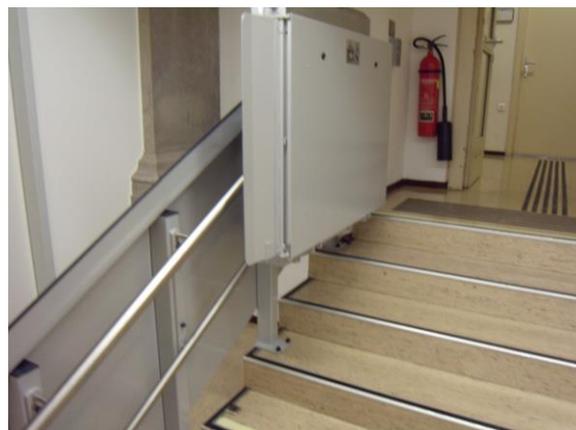


写真 4-⑤

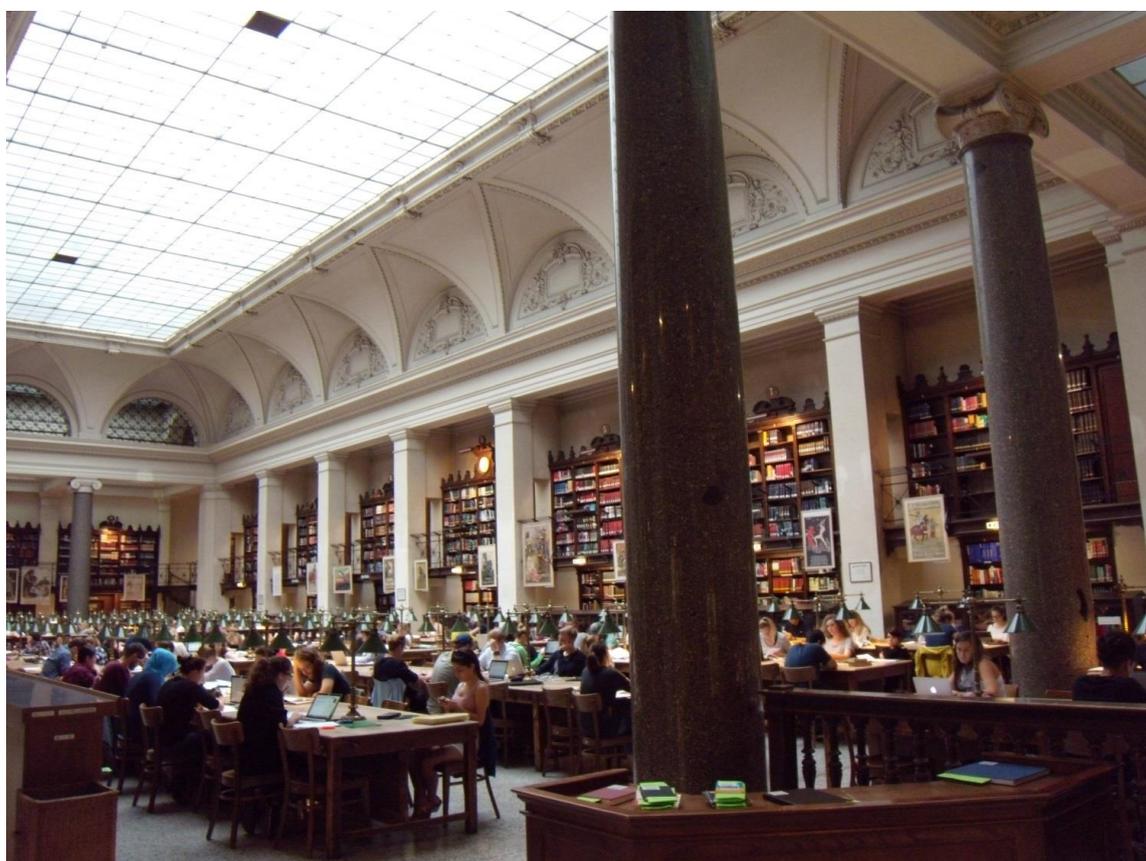


写真 4-⑥

閲覧大ホール(写真 4-⑥)は、現在の建物が出来た 1884 年当時のままの姿が保たれている。吹き抜けの高い天井、周囲を取り囲む風格のある大きな書架には、学部の関連で分類された事典類が約 6 万冊並び、太い柱や壁のレリーフがアカデミックな雰囲気を高めている。2 階ギャラリー一部分へはらせん階段(写真 4-⑦)で上る。

閲覧席は 350 席。各席に電源コンセントが備わっており、無線 LAN も使える。バッグやコート類は持ち込むことはできない。

ここは図書館の中でも人気の場所ということで、夏休み中ではあったが多くの学生が利用していた。図書館を案内して頂いた後、筆者自身図書館見学のまとめを行うために、この閲覧大ホールの席を使わせて頂いた。

このウィーン大学で、かつて教鞭を取ったり学んだ経験を持つフロイトやメンデル、ホーフマンスタールやマーラーなど、歴史に名を残した著名人達も、当時のまま残る図書館のこの閲覧席に座っていたかも知れないと思うと、ここで学ぶ学生たちにとってはそうした意味での「場」としての価値が、ここにはあると感じた。

踊り場は展示スペースとして利用されている(写真 4-⑧)。翌週からウィーン大学を会場として国際カント学会が開催されることにちなみ、カントに関するパネル展示と蔵書の展示が行われていた。

写真 4-⑨はセミナールーム。プロジェクタとスクリーンのほか、隣りには受講者用のパソコン席もあり、図書館主催のガイダンスなどが行われている。学期の始めの初心者向け図書館利用案内や OPAC ガイダンスから、研究テーマに沿った情報検索、著作権法など、多岐にわたるテーマのガイダンスが繰り返し行われ、夜間のコースも開設されている。



写真 4-⑦



写真 4-⑧



写真 4-⑨

館内各所には各種の複合機やスキャナーが設置され、ドイツの図書館同様、データを USB メモリーに保存することができる。大型の資料や傷みやすい資料を撮影するための機器も備わっている(写真 4-⑩)。コピーセンターでは資料の複写やスキャニングの代行も行っており、著作権の切れた資料については、全ページのデジタル化に対応している。

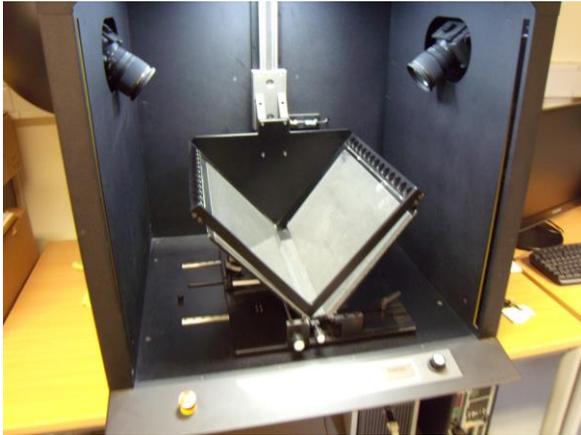


写真 4-⑩



写真 4-⑪

写真 4-⑪は、図書館と同じ本部棟内に、図書館に隣接して 2012 年にオープンしたカフェテリア。スूपビュッフェや温かいスナックも提供している。座席数は 100 席ほどあり、学生生活向上を目指し、学生同士や教員とのコミュニケーションスペースとして新設され、学習相談コーナーも置かれている。飲み物やスナックの自販機もあり、飲食サービス時間後の夜間も開放されている。

写真 4-⑫は館内のロッカースペース。書架・閲覧スペースへ入る際は、カウンターで鍵を受取り、手荷物やコート類はこのロッカーに預けなければならない。飲み物とスナック類の自販機があり、飲食可能スペースとなっている。椅子やテーブルが置かれ、パンをかじりながらスマホで調べもの？をしている学生を見かけた。

授業に関連した資料は授業関連図書閲覧室に集められている。資料は学科ごとに分類され、複本があり、学生限定で貸出も行っている。

閲覧室は吹き抜けのある 2 フロアから成り、落ち着いた空間に書架と閲覧席がある(写真 4-⑬)。ここで必要のなくなった資料は 1 冊 5 ユーロ均一で、バザーという形で販売される(写真 4-⑭)。



写真 4-⑫



写真 4-⑬



写真 4-⑭

閲覧席は吹き抜け周辺の他に、窓際にもあり(写真 4-⑮)、利用者は気分に合わせてお気に入りの席を使っているとのこと。



写真 4-⑮



写真 4-⑯

写真 4-⑯は中央図書館内で唯一のグループ利用席で、これも授業関連図書閲覧室内にある。「グループ利用室など用途に合わせた色々なタイプの部屋を用意する必要性は大いに感じていますが、この建物はリフォームするにもいろいろと制約が厳しくて難しいのです。」という現状を案内のフリードルさんが話してくださった。

図書館外ではあるが、図書館と直結して設けられている中庭(写真 4-⑰)には、折り畳み式のデッキチェアが用意され、勉強の合間にリラックスできる空間としてよく利用されているということで案内して頂いた。その中庭を取り囲むように設けられている回廊(写真 4-⑱)にはモザイク模様の大理石が敷き詰められ、大学ゆかりの歴代の著名人の胸像やプレートが並んでいる。歴史と伝統ある学問の府に相応しい雰囲気醸し出していた。

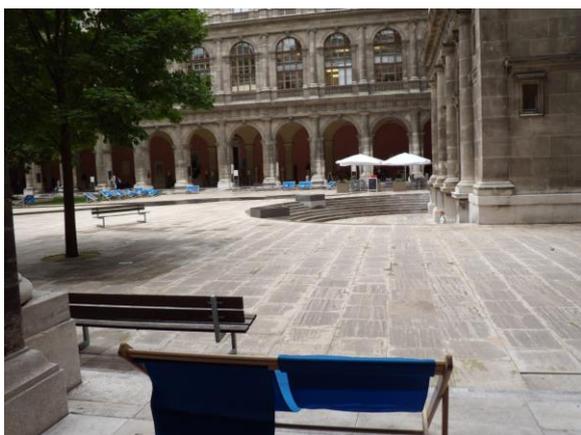


写真 4-⑰

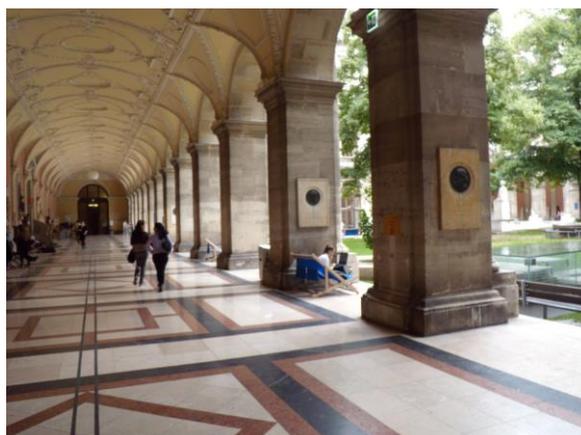


写真 4-⑱

II-5 図書館見学の総括

ドイツの2大学、3つの図書館、ウィーン大学(オーストリア)の図書館、計4つの図書館を見学し、本報告書のテーマである「未来に向けた図書館の「場」としての役割」という観点から全体の感想を述べる。4つの図書館はそれぞれに異なった性格、個性を持ち、それぞれが未来志向の「場」としての魅力を備えていた。

ベルリン自由大学キャンパスライブラリーは、多くの学部図書館や研究機関の附属図書館を統合することで、機能的に利便性が向上しただけでなく、異なる分野の学生にとって、快適な出会いの場を作り出し、新たに学際的な成果を生み出す原動力ともなり得ることを感じた。同じベルリン自由大学の文献学図書館は、図書館全体が丸ごと画期的なエコシステムを取り入れ、資料のデジタル化にも力を入れる一方で、採光や閲覧席の配置などでは、利用者一人一人が落ち着いて過ごせるというだけでなく、人の気配を感じる空間を作り出すなど、まさに図書館へ足を運んでこそ得られる学習環境が整っていることを実感した。

ドレスデン工科大学図書館では、新しい建物のなかで多様な目的に合った様々な閲覧スペースを多数用意するだけでなく、映画「ハリーポッター」に出てくるようなヨーロッパの伝統的な大閲覧室のアカデミックな雰囲気や再現し、学習環境とは、機能面だけでなく、その文化を背景とした伝統的な価値観も重要な役割を果たすことを示していた。そして、ウィーン大学中央図書館では、歴史的な建造物としての魅力を活かし、伝統的な図書館が持つ空気や質感といった、数字では表すことのできない要因が学習効果に与える影響力を、身をもって体験することができた。

このように、それぞれの大学図書館が、それぞれの持ち味を活かした個性的で魅力的な「場」を実現しており、更にどの図書館でも共通して、ブックスキャナー、コピー&製本サービス、障害者ケア、親子ルーム、長期間占有できる個室やワゴン等、日本の大学図書館では十分に実現できていなかったり、発想そのものがないものが提供されており、こうした点は、文化や社会の違いを超えて、日本の大学図書館として大いに参考にすべきであろう。

III 帰国後のアンケート調査

4つの大学図書館を訪問した際、未来志向の取り組みや学生との協働について、意見や事例を十分に聞くことができなかつた部分を補強し、更に同一の条件の下で確認してまとめるために、帰国後、それぞれの図書館にアンケート調査への協力を依頼した。

アンケートでは、日本の大学図書館で多く行われている取り組み例が、どのように受け取られるかを確かめること、同様の取り組みや、日本では行われていないような未来志向型の取り組み、学生協働の事例を調査すること、そして、今後の未来志向型図書館を実現するための計画や展望を探ることを目的とした。

以下に、アンケートでの設問毎に、各図書館から寄せられた回答を記し、筆者による簡単な考察を含むコメントを記載する。なお、ベルリン自由大学キャンパスライブラリーからは回答を得ることができなかった。理由は「III-2 アンケート結果の総括」に記載した。

Ⅲ-1 アンケートの本文と回答(原文はドイツ語)

[アンケート前文]

図書や雑誌のデジタル化は、近年世界中で急速に進んでいます。図書館資料の目録はデジタル化されて久しく、所蔵資料のデジタル化率も年々増大しています。これに伴い、図書館の従来業務である資料検索支援や資料提供サービスは、近い将来、図書館へ足を運ぶことなく、全てがインターネットを介して自宅など館外から行えるようになる日も遠くはないでしょう。そうなった場合、図書館はクラウド上だけの存在で事足りることになるのでしょうか。

この疑問に対して、日本の図書館では新たな施設・設備や催し、新しいプロジェクトを導入し、実在する図書館をより生き生きとした魅力ある存在とする取り組みが行われています。

以下の[設問 1]から[設問 4]の日本の大学図書館による取り組みの事例を読み、それぞれについての意見をご記入ください。また、[設問 5]と[設問 6]では貴図書館における具体的な状況や今後の計画についてご記入ください。

[設問1: 図書館による読書推進支援活動]

日本の多くの大学では、学生達に(学生の専攻分野の主題に関わりなく)、読書を推進する取り組みが行われています。図書館の職員や学生スタッフが、お勧めの図書を推薦文を書いたポップなどと共に展示したり、学生による選書制度を導入したり、大型書店や取次店で選書ツアーを実施して、そこで学生は自分の興味関心のある本を選ぶことができます。

このように、図書館が学生の読書推進運動を積極的に行うことをどう思いますか。

以下の選択肢から該当欄にチェックしたうえで、コメント、実施例があれば記入してください。

非常に重要 / ある程度重要 / 特別重要ではない / 重要ではない

(各館からの回答)

【ベルリン自由大学文献学図書館】

■非常に重要

1. 当図書館では、PDA(Patron driven acquisition)が大きな効果を示しています。これは、利用者自身が図書館の購入資料を決める購入方法です。
2. 私たちの支援協会は、どの学部に支援資金をどう配分するかを決定しています。これにより、学部の独自性を促進しています。

【ドレスデン工科大学中央図書館】

■ある程度重要

教員との協働は欠かせません。

自館での実施例:

図書館のウェブサイト上から出来る KaufTipp と呼ばれる購入希望システムは、資料購入の重要なツールとなっています。また、希望図書が受入れ可能となった場合、購入希望者への優先予約

を行っています。

「自宅学習のための長い夜」²というイベントがあり、蔵書検索指導も行っていきます。

【ウィーン大学中央図書館】

■非常に重要

自館での実施例：図書館ホームページから行うオンライン資料購入希望システム

[筆者コメント]

本が盛んに読まれれば図書館の利用増にも繋がり、図書館の未来像も描きやすくなる。日本では、大学に限らず、10 分間読書、読書週間、読書感想文コンテストなど、学校や家庭での読書の重要性が叫ばれ、様々な運動が行われている。一方ドイツでは、作家による朗読会などは非常に盛んではあるが、読書を取り立てて推進する運動は一般的ではない。大学生が本を読むのは当たり前で、日本の大学生が「趣味は読書」とわざわざ公言する理由を理解できないドイツ人も多い。

このような背景があるため、日本の大学図書館の読書推進運動が、ドイツ人にどう思われるか、ということにも興味があり、この問いを設けた。

ベルリン自由大学の文献学図書館で行われている PDA は、近年米国で注目されて広がってきた、主に電子書籍に関して利用者の利用動向を図書館の資料購入に直結させる購入方式である。文献学図書館のヴェルナー館長は、訪問時にも、これからはデジタル資料の時代であることを強調していただけない、PDA という新しいシステムを積極的に導入し、デジタル資料の利用率を高めようとする姿勢が窺えた。ただ、PDA は利用者の資料利用動向を的確に把握して収書を行うには有効であっても、日本で認識されている「読書推進」とは性質が異なるものかも知れない。

こうした先進的な取り組みを行っている図書館がある一方で、他の2館は読書推進の方法として、オンライン資料購入希望システムを挙げており、この回答を見る限り、日本のように学生を読書へ半ば強制的に仕向けるような取り組みは、その意義も認められていないということが実情であろう。「自ら読書することを求める者には積極的にその機会を与え、支援する」というのが、ドイツ語圏の大学図書館のスタンスではないだろうか。

² 「自宅学習のための長い夜 (Lange Nacht der Hausarbeiten)」: このイベントでは、ショートワークショップ、レポート・論文指導、個人の研究テーマに関する学習指導などが行われる。予約不要で誰でも参加できる。

[設問 2: 出会いの場としての図書館]

大学図書館を、学生・教員・職員の出会いの場とする以下のような試みについて、どのように思いますか。

[多文化交流パーティー]

様々な文化的背景を持つ留学生が集まるパーティーを催し、互いの文化への興味・関心を促し、同時に図書館資料による情報提供を行う。

[ビブリオバトル]

自分のお勧めの本を 5 分以内で紹介する書評ゲーム。紹介した後に質問の時間を設け、最後は参加者と聴衆によりチャンプ本を決める。このゲームで、参加者と聴衆はそこで紹介された本への関心を持ち、紹介者の人となりを知ることができる。

[コミュニケーションルーム]

常に開かれていて、利用の手続きも不要で、いつでも誰でも入ることができるスペース。そこではたまたま集まった人たちが寛いだ雰囲気の中でコーヒーカップを手におしゃべりを楽しむことができる。人気の雑誌が並ぶ書架も置かれ、おしゃべりしながら気軽に雑誌を手にとることができる。

非常に重要 / ある程度重要 / 特別重要ではない / 重要ではない

(各館からの回答)

【ベルリン自由大学文献学図書館】

■ある程度重要

ビブリオバトルは私たちも一度「図書館の長い夜」というイベントの中で行ったことがあり、ある程度の効果がありました。

新しい形として、修士課程の学生による、ディスカッションを交えた自らの論文のテーマについて、7～10 分程度で紹介する企画を実施したいと考えています。そこでは教員著作の新刊紹介なども行われるでしょう。

【ドレスデン工科大学中央図書館】

■非常に重要

コミュニケーションの場としての図書館という考えは、

-学際的な共同研究や情報交換のため

-人的な交流や出会いのため

非常に重要です。

自館での実施例:

-“Makerspace“(20～21 ページ参照)

-ハッカソンやワークショップなどのイベントの開催

【ウィーン大学中央図書館】

■非常に重要

自館での実施例:

博士課程学生のための「ウェルカムデー」として、様々なテーマの講演と、ウェルカム・イブニング・パーティーを実施しています。

[筆者コメント]

人と人が出会い、そこに本が介在するような「場」を作ることは、日本の図書館で様々な試みが行われている。出会いの場所づくりについて尋ねたこの設問への回答では、3 大学図書館とも、ビブリオバトルやワークショップといったイベントの開催を挙げ、ドレスデン工科大学は、見学レポートで紹介した(20~21 ページ)“Makerspace”という共同制作工房を挙げた。

出会いの場を提供することの重要性はどの図書館でも認識され、それぞれに取り組んでいるが、日本での取り組みと比較すると、学生の専攻分野に直結するアカデミックなものや実践的な興味・関心を喚起し、出会いへと繋がる催しにより重点が置かれているようである。その典型と言えるのが、ドレスデン工科大学の“Makerspace”であろう。ここは、文字情報によらない情報提供や知識習得の場として、図書館が未来に向けて取り組むべき分野であると位置づけられている。

[設問 3: ラーニングコモンズへのサポートスタッフの配置]

図書館では近年、場所としてラーニングコモンズを提供することが重視されています。ラーニングコモンズにおいて、可動式のグループ用机、ホワイトボード、モニター、電源プラグなどを備えるだけでなく、情報検索やレポート・論文作成、データベースの使用方法等を人的にサポートするカウンターも配置するという考えをどう思いますか。

非常に重要 / ある程度重要 / 特別重要ではない / 重要ではない

(各館からの回答)

【ベルリン自由大学文献学図書館】

■ある程度重要

これは良い考えだと思いますが、「サポートカウンター」は、従来型のものにすべきではありません。カールスルーエ大学図書館ではKIT(Karlsruher Institut für Technologie: カールスルーエ・テクノロジー・インスティテュート)という興味深い試みが行われています。学生アルバイトが「サポートスタッフ」となり、図書館スタッフとして様々な業務を担当しています。

【ドレスデン工科大学中央図書館】

■非常に重要

グループ学習室はとても重要ですし、そこにPCが設置されていることも重要です。

自館における例:

グループ学習室とセミナールームには一部PCが設置されています。

【ウィーン大学中央図書館】

■非常に重要

(コメントなし)

[筆者コメント]

多様な学習形態を、多機能な机や椅子、便利な備品など施設としてサポートするラーニングコモンの重要性は、既に世界的に認識されており、最近では「キレイな机と椅子があればラーニングコモンは事足りるのか」という疑問が生まれている。これを前提として、そこに人的サポートを付加することについて尋ねた設問。

ベルリン自由大学文献学図書館では、これに沿った回答が得られたが、ドレスデン工科大学中央図書館ではPCの設置を例示し、ウィーン大学中央図書館はコメントがなく、具体的な人的サポートの重要性や事例は示されなかった。

ベルリン自由大学文献学図書館を案内してくださったヴェルナー館長が、「従来型のレファレンスカウンターを設けても最近では利用者が来ない。」としきりに強調しておられたことが、この設問でのコメントにも反映している。回答を補足する形で、カールスルーエ大学図書館の例が挙げられている。主に大学院生を中心に、学生が学修サポートを行うことは日本では近年広まっているが、ドイツにおいては珍しい例のようだ。これには、次の設問での学生との協働での、日本との状況の違いが一つの要因と思われる。

[設問 4: 学生のサークル活動の場としての図書館]

日本の多くの図書館は、希望する学生によって組織される図書館学生スタッフのサークルを導入しています。学生サークルのメンバーは一般的な図書館の業務に留まらず、より魅力的で生き生きとした図書館にするためのアイデアを出しあい、例えば以下のような活動を行っています。

新入生向けの学生の視点に立った図書館ガイドツアー

学生による図書紹介コーナー: 学生が選んだ図書館資料を、場合によってはあるテーマに絞って、紹介コメントや手作りのポップと共に展示します。

図書館スタンプラリー: 図書館内の要所でスタンプを集め、或いは図書館の利用方法や蔵書検索に関連した質問に答えながら、図書館内を進んで行くツアーです。

このような図書館をより魅力的で生き生きとした場とするための学生との協働についてどう思いますか。

非常に重要 / ある程度重要 / 特別重要ではない / 重要ではない

(各館からの回答)

【ベルリン自由大学文献学図書館】

■特に重要ではない

そのような試みは、当館ではあまり効果が見込めません。学生による図書館支援協会³という団体が、近年活動を行っています。

【ドレスデン工科大学中央図書館】

■非常に重要

居心地のいい場所やコミュニケーションスペースなど。

対話(ダイアログ)と参加は利用者が何を求めているかを知り、それに即したサービスを行う上で欠かせない要素です。

自館における例:

ベータ版目録:利用者からのフィードバックを元により良いものに上げています。

“Makerspace“:利用者からの意見・要望を取り入れながら、より良いものに作り上げています。

【ウィーン大学中央図書館】

■非常に重要

(コメントなし)

[筆者コメント]

日本の多くの大学図書館で行われている、図書館をより魅力的で生き生きとした場とするための学生との協働では、学生がサークル活動の一環として行っていることが多い。一方、ドイツ語圏の大学では、学生組織はあっても日本のような大学単位の学生サークル活動というものが、図書館サークルに限らず殆ど存在しない。このため、図書館活動をサポートするために学生のサークルを組織する、という発想はないと思われるが、日本で行われている取り組みについてどのような意見が出るか、また、学生が図書館活動に何らかの形で関わる可能性があるかを知りたくて、この設問を設けた。

ベルリン自由大学文献学図書館の図書館支援協会は注目に値するが、図書館資料購入費の資金援助以外で、学生が図書館の運営に関わることはなさそうで、ドレスデン工科大学中央図書館が挙げた例も、組織的な学生協働には当たるようには見えない。日本で認識されている意味での「学生との協働」が、ドイツの大学図書館で行われている事例は得られなかった。

[設問 5: 図書館における未来志向の設備]

貴館において、図書館が利用者にとってより快適で魅力的な存在となるための設備はありますか。或いは今後の導入計画はありますか。

(各館からの回答)

【ベルリン自由大学文献学図書館】

可動式の家具を置いたグループ学習室があります(写真 2-18)。とりわけ美しい例としては、コン

³「図書館支援協会 (Förderkreis Philologische Bibliothek e.V.)」: 学生によるボランティア団体。主な活動は図書館資料購入のための費用面での支援。出版者や個人等からの寄贈図書を「ブックバザー」と称するバザーで販売し、図書館の資料購入資金に充てている。これまでに 2 万冊超の寄贈があり、20 万ユーロ以上の収益を上げている。

スタンツ大学図書館の新しい設備や、スイスのヴィンターフーア大学の「学びの風景」(Lernlandschaft/英:Lerning landscape)を挙げることができるでしょう。

【ドレスデン工科大学中央図書館】

- “BibLounge”(カフェテリア)
- “Makerspace”(実験・制作工房 写真3-⑱参照)
- “Bibosphäre”(リラックスゾーン 写真3-⑬参照)

などがあります。

【ウィーン大学中央図書館】

(回答なし)

[筆者コメント]

この設問では、図書館を居心地の良い快適な場とするための、ハード面の設備について尋ねた。今回訪問した4つの図書館のうち、建物が非常に古く、大きなリフォームも困難なウィーン大学中央図書館を除き、どこも館内に息抜きのできるくつろげる場所を設けていた。ベルリン自由大学文献図書館からのアンケートの回答では触れられていないが、同館最上階にあるラウンジ(写真2-⑭)なども、この設問への例として挙げられるべき場所であろう。ドレスデン工科大学中央図書館のリラックスゾーン(Bibosphäre)に置かれているコーチはアイデアとしても面白い。また、アンケートの回答を得られなかったベルリン自由大学キャンパスライブラリーの、植物と噴水を取り入れたスペース(写真1-⑮、⑯、⑰)は、注目に値する。どの図書館でも、利用者が求める様々な形の快適性を、施設として実現しようとする姿が窺えた。

[設問 6: 未来志向型のプロジェクトについて]

貴館において、図書館をより魅力的にするための催しやプロジェクトはありますか。

(各館からの回答)

【ベルリン自由大学文献学図書館】

貴重書用の閉架書庫を3部屋分のグループ学習室に改修したいと考えています。また、当館最上階のフロアにある書架を撤去して、様々な目的にフレキシブルに対応できる家具を置いた自習スペースを設けたいと考えています(こちらは音の問題があるため、1人用学習スペースとなります)。

【ドレスデン工科大学中央図書館】

デジタルサイネージによる利用者スペースと館内案内システムの改善
館内ディスプレイ、グループ利用室内のディスプレイ等を使ったイベント情報や、個室予約情報システムの構築などがあります。

【ウィーン大学中央図書館】

「夜のシフト」という日を設けています。各学期末の一晚、図書館は学生の論文の仕上げのために夜通し開館します。図書館職員が学生のために、資料検索や引用のルール等についてサポート

を行います。トレーナーによる集中力を高めたり、リラックスするためのトレーニングも行われます。軽食なども用意され、最後には朝6時から、徹夜明けシャンパンパーティーが行われます。

[筆者コメント]

アンケート最後の設問では、図書館を魅力的な場とするためのイベントやルール作りなど、ソフト面での取り組みを尋ねることが目的であったが、ベルリン自由大学文献学図書館は、施設を充実させるプランについての回答となった。ウィーン大学中央図書館が挙げた「夜のシフト」というイベントは、他の2つの図書館も別の設問の回答で、同様の催しの実施について述べており、通常の開館時間を大幅に延長して、学生の学修支援のために講演や個人指導を行うイベントは、ドイツ語圏の図書館ではよく行われているもののようだ。このようなイベントは、図書館のサービスがデジタル化・機械化されても必要とされる催しで、特にパーティーを連動させるウィーン大学中央図書館のような例は、夜通し頑張った者同士で最後に打ち解け合う、という意味でも、良い出会いの場を演出しているのではないだろうか。

Ⅲ-2 アンケート結果の総括

主に、図書館の将来像を見据えた魅力的な「場」とする取り組みや、学生との協働について尋ねたアンケートを通して、日本ではあまり例が見られない取り組みとして、夜を徹したワークショップなどのイベントが行われていることを知ることができた。図書館という実在の「場」を利用して、学生が自らの専攻分野に関するスキルを向上させるだけでなく、居合わせた学生同士の出会いの場としても、注目すべき取り組みであると言える。

その一方で、学生との協働についての事例は殆ど示されなかった。また、アンケートの質問の主旨に対する明確な回答を得られなかったケースも少なくなかった。アンケートへの協力を依頼した図書館のうち、ベルリン自由大学キャンパスライブラリーからは、回答そのものを得ることができなかったが、これについて同図書館より以下のコメントが寄せられた。

「長い時間お待たせして申し訳なかったのですが、結局お送り頂いたアンケートにお答えするのは困難ということになりました。アンケートの設問が、当館の性格上、利用者が求めていることや、当館の使命やサービスに沿ったものとは言えず、お役に立つような回答ができないと判断いたしました。」

読書推進の捉え方や、学生との協働などで、日本とドイツ語圏の大学図書館の間では、文化や制度上で大きな隔たりがあり、日本の実情を前提とした設問を正しく理解できなかつたり、戸惑いを感じた様子は、他館の回答からも伺える。ドイツ語圏の大学では、日本のように学生を手とり足とりサポートする態勢はおろか、そうした発想自体がなく、情報提供のための周知方法も必要最小限で行うことが多い。今回アンケート調査を行ったことにより、こうした違いを改めて実感することもできた。

IV おわりに

現地での図書館訪問と、帰国後のアンケート調査という2段階で行った今回の調査では、現地で丁寧に対応して下さった方々のおかげもあり、とりわけ図書館訪問において多くの成果を得ることができた。現場で相手の方と直接コミュニケーションを交わしながら意見を伺い、情報収集することの大切さを実感した。

館内の案内や面談のために時間を割いて対応して下さった訪問先の大学図書館の方々に、ここで改めて感謝を申し上げたい。また、ドイツ語のアンケート作成に当たっては、獨協大学外国語学部ドイツ語学科教授、イルムトラウト・アルプレヒト氏にご協力頂いた。併せてここで感謝を申し上げたい。

V 参考文献、および URL

<文献>

- ・Freie Universität Berlin -Neues aus Wissenschaft und Forschung, 2015/Nr.22401
Freie Universität Berlin, 2015
- ・Geschäftsbericht 2014 der Sächsischen Landesbibliothek - Staats- und Universitätsbibliothek Dresden
Gesellschaft der Freunde und Förderer der SLUB e.V., 2014
- ・はじめてみよう！図書館サービス・スタートブック
私立大学図書館協会東地区部会研究部 2012/2013 年度パブリック・サービス研究分科会, 2014
- ・PDAで変わる選書の未来：千葉大学・お茶の水女子大学・横浜国立大学三大学連携プロジェクトの取組み
立石亜紀子、餌取直子、庄司三千子
情報の科学と技術 65(9), 2015-09 社団法人情報科学技術協会

<URL>

- ・Campusbibliothek - Freie Universität Berlin 最終アクセス日:2016年2月23日
<http://www.fu-berlin.de/sites/campusbib/>
- ・Philologische Bibliothek - Freie Universität Berlin 最終アクセス日:2016年2月23日
<http://www.fu-berlin.de/sites/philbib/>
- ・SLUB Dresden 最終アクセス日:2016年2月23日
<https://www.slub-dresden.de/startseite/>
- ・Universitätsbibliothek Wien : Hauptbibliothek 最終アクセス日:2016年2月23日
<http://bibliothek.univie.ac.at/hauptbibliothek/>
- ・KIT-Bibliothek 最終アクセス日:2016年2月23日
<http://www.bibliothek.kit.edu/cms/index.php>